

「誠意と慈愛の人」人間、山本五十六の生涯を辿る

山本五十六記念館

ごあいさつ

明治17年(1884)、儒学者の家系に生まれた高野五十六は、聡明で、中学の頃からベンジャミン・フランクリンを尊敬、猛勉強するなど広い視野を持っていた。旧長岡藩家老・山本帯刀家を継ぎ、旧会津藩士族の娘と結婚。文武両道、質実剛健、常在戦場の長岡らしい精神に磨きがかかる一方、石油や航空に早くから注目。リンドバークの大西洋横断にも触発され、特に航空の重要性を力説。太平洋戦争開戦時、その先見性を世界に実証した。

開戦にはあくまで反対だった。「この身滅ぼすべし、この志奪うべからず」と、わが身の危険を省りみず、日独伊三国同盟に断固反対した姿勢は、人々を愛し、郷土を愛し、慈愛の心を強く保っていたからこそである。

だが、その意に反し連合艦隊司令長官として未曾有の大戦争の指揮をとった。昭和18年(1943)ブーゲンビル島で戦死。激動の世紀に、しなやかかつ強い心で生きた山本五十六の人間性を、21世紀に語り伝えたいと願う。

山本五十六記念館



▲記念館外観



主な展示内容

- ◆高野五十六の誕生 生家高野家の歴史。家族、恩師、友人との交流。
- ◆山本五十六となる 長岡藩風。長岡の歴史・風土。旧藩家老・山本帯刀家の継承、結婚。
- ◆世界をめぐる 駐米武官、国際会議などを通して身につけた国際的視野。外国でのエピソード。
- ◆誠意と慈愛 多くの人々に愛された人間性。
- ◆平和を求めて 海軍軍縮条約の締結に努力。三国同盟に徹底的に反対。
- ◆連合艦隊司令長官 アメリカの国力、国民の気性を知り抜き、早期講和をのぞむ。
- ◆いまに生きる山本五十六の心 その「人となり」を知り、未来に伝える。(このコーナーは展示品がかわります)



山本五十六記念館

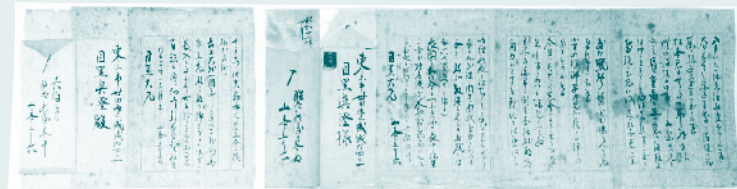
新潟県長岡市呉服町1丁目4-1
TEL・FAX 0258-37-8001

開館時間	午前10時～午後5時
入館料	大人(高校生以上)…500円 小・中学生 ……200円
休館日	●年末年始12月28日から1月4日まで。 ●展示替えのため臨時休館させていただくことがあります。

【駐車場】 普通車6台、大型バス1台
他に臨時駐車場有り

■JR長岡駅から徒歩10分 ■北陸・関越自動車道長岡インターチェンジから車で15分

主な展示品



昭和17年10月 目黒真澄宛

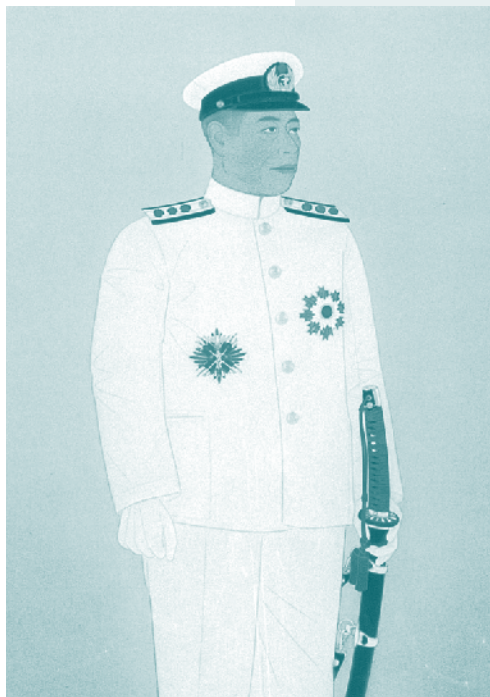
軍艦大和からの書簡

— 「長岡も和同会をつぶすような長中根性では当分、格別すぐれた人物は出ない」 —

「彼を知り、己を知り」ながら、みすみす危うい道を歩まなければならなかった山本は、昭和17年(1942)10月初旬、長岡中学校同期の親友目黒真澄に宛てた書簡で、こと志と違った自らの悲運を嘆じた。

ソロモン海戦後、日本海軍が守勢に転じたことで、「アメリカは国力と国民の気力では日本より数等強靱」と断じて真情を吐露している。

また、文末では伝統ある和同会の改組、改名を残念なこととし、自らの意志とは違った方向に流れて行く時勢を率直に慨嘆している。



山本五十六肖像画

中村大三郎画

作者の中村大三郎(1898~1947)は、現代風俗の美人画を得意とする日本画家でした。派手な色彩を使った日本画は、観る人びとを魅了していたわれています。代表作に「髪」「三井寺」「野々宮」などがありますが、この山本五十六像は、大三郎の作品として、めずらしいものです。その中村大三郎は京都に生まれ、京都絵画専門学校を卒業。母校で教鞭をとり、帝展の審査員となった人物です。

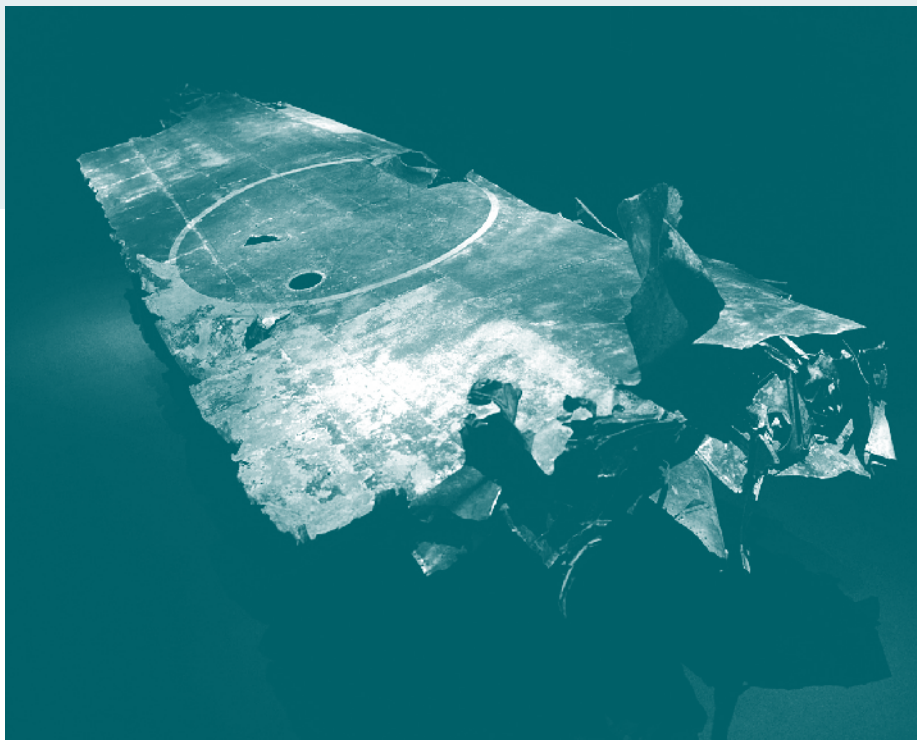
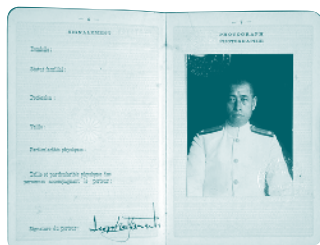


昭和15年(1940)6月20日 渡部與喜子宛

軍艦長門よりの書簡

満50年の御薫陶に対し

渡部家は、渡部與の死(昭和15年5月30日没)を、山本連合艦隊司令長官に知らせなかった。ところが、長官は他から聞き、同年6月12日付で弔詞と香典を送った。それに対し長女の與喜子が、臨終前後の様子を同月15日付で伝えた。この書簡はその返書である。明治23年(1890)阪之上尋常小学校入学時1年の担任以来、満50年の御薫陶に対する謝意が記されている。超多忙な身であっても、先生の恩に感謝し、遺族を温かくいたわる情愛の深い人がらを感じる。



長官搭乗機の左翼

連合艦隊司令長官山本五十六ら11名が搭乗した海軍一式陸上攻撃機の左翼部分。この機には山本のほか副官福崎昇、軍医長高田六郎、参謀極端久利雄が同乗し、機長小谷立以下大崎明春、田中実、畑信雄、上野光雄、小林春政、山田春雄の乗員がいた。昭和18年4月18日午前7時30分すぎ、ソロモン諸島バラレ島におもむく途中、アメリカ陸軍の戦闘機の襲撃をうけ墜落し、全員が戦死した。昭和59年(1984)2月山本五十六の生誕100年を記念して、山本元帥景仰会は、ブーゲンビル島のジャングルをたずね、搭乗機の残骸を前に慰霊祭を行った。その後、バブアニューギニア政府の厚意により平成元年(1989)、左翼の里帰りが実現した。



ワシントン議事堂前の山本

米国駐在大使館付武官

大正14年(1925)12月1日に命じられ、翌年1月出発、昭和3年(1928)3月に帰国した。職務の一つが、駐在員の監督指導であった。日本で出来ない視察旅行をせよ、そのため日々俊約に努めよ、語学は着任当初数か月間で習得せよと強調した。昭和2年にはワシントンで行われた国際無線電信会議に日本委員として活躍した。同年、アメリカのリンダーバーグが世界最初の大西洋横断飛行に成功した。この壮挙を科学的に研究し、海軍航空隊の改善(例、勤尊重飛行から計器飛行への転換)を報告した。

日本人形

「ますみ」(真珠湾)と、名づけられたこの日本人形は、慰問品のなかから、特に選んで大切にしてきたものである。朝夕、それを見つめて人形になぐさめられた心遣いはかりしれない。人形の着物に山本家の家紋がついている。



パスポート

昭和9年(1934)9月、海軍軍縮会議予備交渉に出席する際のパスポート。出発にあたって、自室に西郷隆盛の遺訓「正道を踏み、国をもって倒るるの精神なくば外国交際全かるべからず」の書幅を掲げ郷土の友人反町米一につぎのように語っている。「私は河井継之助が小千谷談判に赴き、天下の和平を談笑のうちに決しようとした、あの精神をもって使命に従う。軍縮は世界平和、日本の安全のため、必ず成立をさせねばならぬ」と。